

遺歌集考―米川稔と岡井隆―

三沢左右

さる八月十二日、松村正直のオンラインイベント「軍医の見た戦争―歌人米川稔の生涯」が開催された。「多磨」の創刊メンバーであり、医師でもあった米川は、北原白秋の最期を看取った。一九四四年、戦地ニューヨークで亡くなった米川の遺歌集『舗道夕映』は、宮柁二の編纂により、一九七一年に刊行された。レジュメからの孫引きになるが、イベント中で紹介された米川作品を引用する。

一面のぬかるみの上にけふもまたマラリア病舎ひとつ建ち添ふ

未定稿のわが歌が事しく載せられて怡しまざれどなげかひふかし

一首目、戦地の臨場感を生々しく湛える作品だ。米川の歌稿は、細やかな歌集の構想を添えて、吉野秀雄に託されていたらしい。戦地でありながら、米川は作品に非常なこだわりを示していた。二首目のような歌や、自作中のただ一語の訂正を吉野に依頼する書簡など、幅広い資料を駆使して松村は米川のことわりを丁寧に分析した。

自身も戦争体験を歌集『山西省』に残した

宮柁二は、『舗道夕映』の刊行の感慨を、歌集『獨石馬』において、「米川稔（一）（二）」と題された連作で十五首の作品にしている。

亡き君の歌集やうやく成りたるものに悲しかるこの心何 宮柁二『獨石馬』

生き残りたるもの我の胸に未だなほまなまし「戦死」といふは

*

松村のイベントの記憶も新しい八月下旬、岡井隆の遺歌集『阿婆世』を読んだ。そして、遺歌集とはつまるところ何なのだろうかということを考えた。

遺歌集がどのように編まれるのかを考えると、いくつかのパターンが想像できる。

第一、生前になんらかの形で残された作者の遺志を忠実に反映させて作られるもの。米川稔の『舗道夕映』はこちらに近いだろう。

第二、作者とその作品をよく知る身近な人物が編集し、完成させるもの。岡井隆『阿婆世』はこちらだろうか。構成は田中槐と記載されている。

また、岡井のように作者が著名な場合、そ

の編者の意向以上に、作者のパブリックイメージに沿った「作者かくあるべき」一冊が目指されるという面もあるだろう。

ああこんなことつてあるか死はこちらむいてほしい阿婆世といへど

岡井隆『阿婆世』

歌集掉尾の一首だ。歌集名にも採用され、本歌集においてどのような作者像が目指されたのが伝わってくる。

さすがに、新奇な表現や挑発的な内容で短歌の新たな地平を開拓するという印象は希薄な歌集だ。収録歌数も多くない。しかし、時折見せる切れ味は鋭い。

岡井隆の歌には色気がある。肉声のような口語が、どつしりと基底を為す文語定型の韻律の上に乗ることで生まれる緊張感が、色気を生むのだろう。『阿婆世』読了後、岡井の過去の歌集をいくつか再読したところ、岡井の韻律意識がより生々しく伝わってくるのを感じた。

遺歌集の歌壇史的な意義、個人史的な意義は多様である。しかし、作者や編者の目指したものを真摯に受けとめること、そして何より、一首一首に丁寧に向かい合い、作者の創作の源流を感じ取る態度こそが、私たち読者には求められるのだと思う。